

たまのよこやま

考古学って楽しい!

速報!

東京都埋蔵文化財センターの

新しい体験イベント 2

東京都埋蔵文化財センターでは、毎年数多くの体験行事を行っています。前回に引き続き、今年度から新たに始まった企画についてご案内します。

東京都埋蔵文化財センターでは、体験教室や講演会などを通して、私たちの仕事、そして考古学について都民の皆様に一層の理解を得られるよう努めてまいりました。なかでも縄文アクセサリー作り教室や古代の布作り教室は、小学生にも人気の行事です。一方、このような体験教室とは別に、考古学の専門的な体験をする「考古学実習」教室を行っております。これまでも実習として、考古学を志している者の基礎作業となる拓本採りや縄文原体教室などを行ってきました。

そこで、以前から私たちが大学時代に考古学を専攻し必ず実習で身に付けた技術を皆さんに体験していただきたいと思っていたことを今年度企画してみました。

それが、「遺構を実測してみよう」と「遺物を撮影してみよう」です。遺跡の調査は、必ず詳細な記録を残す必要があります。この2つの作業は非常に重要なことで、調査報告書の良し悪しは、その実測図や写真で左右されることさえあるほどです。

「遺構を実測してみよう」9月29日(土)

遺跡庭園「縄文の村」に露出復元展示された2軒の住居跡を平面実測する実習です。やや肌寒い日ではありましたが、8名の参加者は、2班に分かれて平板実測による測量方法を体験しました。私たちが考古学専攻生のころは、まだ平板を使つての実測が行われている遺跡調査が結構ありました。

先ずは実測に必要な道具の説明です。レベルやトランシット、そしてその測り方を学習していただき、次いで平板の設置手順、アリダートの見方と三角スケールの使い方のレクチャーを行いました。これらをマスターしたところで、作図をする人、メジャーを持つ人、ポイントにポールを立てる人の役割分担を決め、数ポイントずつ交代しながら進めていきました(表紙写真)。とにかく、実際の遺構と同じ形に作図することが、いかに大変であるかを参加者の皆さんには十分理解していただけたと思います。4時間の体験でしたが、時間はあっという間に過ぎていました。

「遺物を撮影してみよう」11月23日(土)

発掘調査報告書には、必ず遺構と遺物の写真が掲載されています。代表的な遺物は、1点ずつ撮影して掲載することが一般的で、その撮影方法には考古学的手法が用いられます。参加者の皆さんも、その手法にはただただ感心するばかり。今回の被写体は、縄文時代前期と中期の土器5個体で、正面から撮る正立撮影の実習です。もっと時間があれば俯瞰写真の撮影方法も指導したいところでした。

最近の写真撮影は、ストロボを使用することが多い傾向にありますが、今回はライトを当てての撮影方法を探りました。参加者の皆さんは初めての経験と見え、影の取り方や左上方からのライトを当てる方法にとまどっていました。

また、どのようにしたら写真でその土器の特徴を的確に表現できるかを課題として、土器の正面なども考えていただきました。

参加者の皆さんは、自分の好みの縄文土器を撮影して、十分満足されたようでした。

このような考古学を志す者が必ず経験することを体験された今回の参加者の方々は、きっと考古学の世界に一層のめりこんだことではないでしょうか?

来年度も、考古学実習を充実してまいりたいと思っておりますが、皆さんからも是非やってみたいことを聞かせていただければ幸いです。(竹尾)



アリダート(左)と
三角スケール(中央)



こんな
ライティングで
どうかな?

武蔵国府関連遺跡の府中合同庁舎地区は、府中市街地の中心を南北に走り大國魂神社にいたる櫛並木通りを西側に 200 m ほど入ったところにある、東京都の府中合同庁舎跡地に所在します。合同庁舎の建設に伴い大半が壊されていたにもかかわらず、古代から近世に至るまでの遺構、遺物がまとまって検出され、この地の土地利用の一端をうかがい知ることができました。

府中市は、奈良・平安時代に武蔵国の国府が置かれ、政治の中心地であったところでした。古代武蔵国は、現在の東京都、埼玉県、神奈川県の一部にまたがる広大な地域にわたっています。国府の中心である国庁跡が現在の大国魂神社境内とその東側一帯にあり、その国庁跡を中心に東西約 6.8km、南北 1.8km にわたる地域が武蔵国府関連遺跡として登録されています。なかでも、大国魂神社境内を含む国衙地区と推定される一帯は、平成 21 年（2009）国史跡『武蔵国府跡』に指定されました。

今回の調査区は、武蔵国府関連遺跡のなかでも中心的な施設や集落が多く発見される「武蔵国府域」の一角に当たり、国史跡に指定された国衙地区の北西約 300 m の地点に位置します。国庁に付随する何らかの区画施設があったとされる地区の南端に相当すると推定され、中世の井戸等で出土した瓦をはじめとする奈良・平安時代の遺物は、近くに瓦を使用した古代の建物が存在した可能性を示唆しています。

調査地点は、武蔵国府関連遺跡のなかで中世の遺構・遺物の出土が多い地域でもあります。今回検出された遺構のうち、中世の遺構であることが確実なものに、地下式坑 M57-SZ103 と井戸 M58-SE05 があります。SZ103 では、床面近くから大量の炭化物が検出され、SE05 からは、中世の常滑産の甕の破片と共に古代の瓦が多量に出土しました。本調査区の東側にある称名寺は、寛元 3 年（1245）に開山され、その敷地は現在の境内よりもはるかに広がったという伝承があります。本調査区も、その境内の一部であった可能性が考えられます。なお、隣接する 1115 次調査地区では、37,213 枚にも上る埋蔵銭が発見されており、609・651 次調査地区からは、多くの地下式坑や井戸、柱穴と青磁皿、青銅製法具、板碑などが検出されています。

江戸時代になると甲州街道が整備され、宿場町として栄えました。本調査区は、宿場町遺跡（府中市 No. 11）の範囲外ではありますが、宿場町遺跡に隣接し甲州街道北側の小道沿いに位置しており、ピットや土坑など江戸時代のものと思われる遺構が多数検出されました。なかでも大型の土坑 M58-SX95 は、覆土中に大小の礫が大量に詰まっており、礫の合間に陶磁器などの遺物も多く見られました。遺構の性格は不明ですが、特筆されます。

なお、調査成果を東京都埋蔵文化財センター調査報告第 274 集として刊行しました。（武笠）



調査地点の位置 (1/6,000)



古代の軒平瓦



M58-SX95 (近世の大型土坑)

ぶらり旧石器さんぽ Vol. 3

崖上の遺跡 国分寺市多摩蘭坂遺跡ほか

「ぶらきゅう」シリーズでは、東京都内の旧石器時代の遺跡を訪ね、旧石器時代人がどのような場所に暮らしたのか、それぞれの土地の起伏などの地形と景観の復元を通じて、紹介していきます。

国分寺崖線 伝説のロックスター、**忌野清志郎**の曲「多摩蘭坂」は若者のやり場のない哀切な気持ちを表現した名曲ですが、国分寺市内藤にある実際の坂の名前に由来します。あまりに急なため「たまらん」と言ったことから名づけられたそうですが、このことは坂の横切る崖が大きな高低差があることを意味します。

多摩蘭坂のある崖は**国分寺崖線**といい、高低差10～20mの立川市から大田区まで約25kmも続く長い崖の一部です。武蔵野台地の上位の武蔵野段丘と下位の立川段丘の境にあり、多摩川の流路の変遷によって形成されました。

遺跡と湧水 この長い崖のすぐ上には、旧石器時代の遺跡が連綿と続いています。図を見ると、武蔵野台地の中でもひと際遺跡が集中していることがわかります。多摩蘭坂の近くにも多摩蘭坂遺跡という大規模な遺跡があります。

旧石器時代人は、崖下の川などの水を求めて、崖上の見晴らしのきく場所を選んで繰り返して居住します。国分寺崖線の下には現在でも、多摩蘭坂の東1.5kmにある**真姿の池**をはじめ、多くの湧水があります。



多摩蘭坂

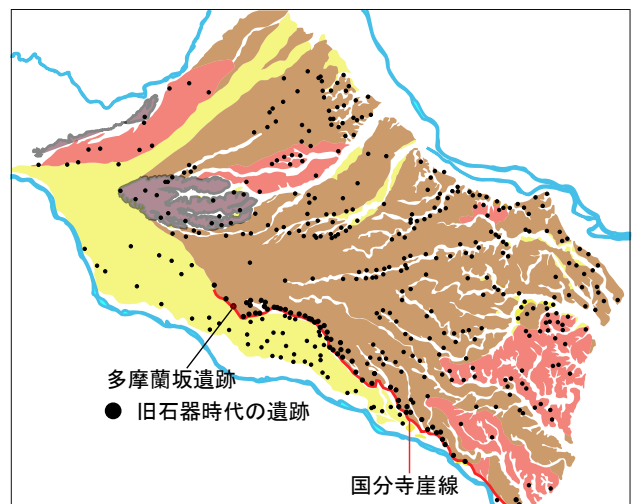
実際にはそれほど急な坂ではないが、長くただらとしていたので、重い荷物でも持っていれば「たまらん」気分になる。坂の両側に多摩蘭坂遺跡がある。

旧石器時代でも湧水が豊富だったと考えられますので、見晴らしの良さといまわって、旧石器時代人が好んで居住地に選んだのでしょう。

多摩蘭坂遺跡は約3万5千年前の、東京都内で最も古い遺物が出土している遺跡の一つです。国分寺崖線上にはこのような最古級の遺跡が多いので、初めて武蔵野にやってきた旧石器時代人は、この崖上での居住を好んだものと思います。(伊藤)



多摩蘭坂バス停



武蔵野台地の遺跡

国分寺崖線の直ぐ北側に遺跡が集中しているのがわかる。



真姿の池湧水群

近くには武蔵国分寺跡資料館、万葉植物園などがあり、散策を楽しむことができます。国分寺市東元町3丁目・西元町1丁目(国分寺駅から徒歩15分)

暦が記された茶碗 一新宿区水野原遺跡第5次調査の出土資料から一

「西向く土」と書いて“にしむくさむらい”と読む。——こんな語呂合わせで、小の月である2・4・6・9・11月を覚えませんでしたか。現行の暦では閏年を除いて各月の日数は定まっていますが、明治5年改暦以前の天保暦（太陰太陽暦）では、大の月（30日）・小の月（29日）の並びが毎年複雑に異なります。そのため、やっかいな月の大小の並びを正しく知っておくことは、当時の人々にとっても重要であったことでしょう。そこで幕府公認の頒暦の普及とともに、大小暦や略暦が紙媒体以外の陶磁器や木製品などにも現れてきました。

今回紹介する新宿区水野原遺跡5次調査から出土した京焼の陶器碗は、「暦茶碗」・「暦文碗」・「暦手文碗」などと呼称されるうつわです。朝鮮や唐津の三島手など様式化した抽象文様の「暦手」とは異なり、ある一年の略暦が月順を追って具体的に書き巡らされているのが特徴的です。この月頭暦タイプの「暦文碗」は暦学研究の世界においても長らく認知されていみませんでした。近世考古学による事例の増加を受けて、故森本伊知郎さんが取り上げた論文を契機として知られるようになった大小暦の一種なのです。

器面の記述内容は、月の大小、朔日の十二支、暦註として二十四節気（五月節「芒種」、六月節「小暑」、七月節「立秋」、八月節「白露」）、選日（八専・庚申・己巳）、雑節（土用、半夏生、二百十日、彼岸、冬至）、そして月食。肝心の紀年名を欠失していますが、大小の月の配列と朔日の十二支から寛延2年（1749）のものとして見て間違いのないでしょう。

稲垣正宏さんは「謎の暦茶碗」のなかで、「暦文碗」の不思議な点として、出土資料の年号に2度の隆

盛が見られることをあげています。享保から寛延年間までの1730年代から1750年代前半にかけての短期間に集中したのち忽然と姿を消し、1820年代以降になって金沢を中心に九谷焼や地方窯の製品として再び現れる。藤田邦雄さんはこの復活劇の背景に、江戸後期に主に金沢で頒布されていた月頭暦との類似性を指摘しています。

しかし「謎」が謎たる最大の理由は、この茶碗の用途がいまだ判然としないところにあります。森本さんは「雑節」の記述内容から、富士講など特定の信仰集団の関与の仮説を立てています。さらに用途の可能性を考える手立てとして、滝沢馬琴『耽奇漫録』の「歳玉茶碗」を紹介していますが、そこに描かれた享保20年（1735）銘の筒形碗は掲載写真のうつわによく似ています。稲垣さんら他の研究者も正月の初釜や大福茶との関連を可能性のひとつにあげています。正確に抄写された暦註の実用的側面は年末年始の贈答品としても、また縁起物として新年を祝うに相応しいのではないのでしょうか。

そういえば、寛延2年の干支は己巳。同じ巳年のうつわの徳にあやかって、皆さまにとって新年も良き一年になりますように。（大八木）

*この遺跡の報告は、当センター調査報告第252集として2010年に刊行されています。

<参考文献>

- 稲垣正宏 2002 「謎の暦茶碗」『日本の暦と歳時記』別冊歴史読本31号 新人物往来社
- 藤田邦雄 2004 「暦手文碗と月頭暦」『金沢大学文化財学研究』6 金沢大学
- 森本伊知郎 2009 「貞享暦を記した陶器碗」『近世陶磁器の考古学』雄山閣



寛延2年(1749)の暦が記された茶碗(新宿区水野原遺跡5次調査35号遺構出土【左:展開写真】)

縄文の木の実アラカルト

平成24年度 年間展示解説シリーズ その3

今年度の年間展示「縄文人の食事」では、遺跡で出土した縄文時代の植物食とドングリやトチノキ、クルミなどの木の実に関する展示コーナーを設けています。そこで今回の年間展示解説シリーズは、知っているようで意外と知られていない縄文時代の「木の実」について書いていこうと思います。

まずは**ドングリ**。ドングリと一口にいても、いろいろな種類があることをご存知ですか？アクがなくそのまま食べられるもの（スダジイ、マテバシイ、イチイガシ）もあれば、アク抜きをしなければ食べられないもの（クヌギ、コナラ、ミズナラ等）もあります。

先日当センターで行った「縄文食体験」のイベントでは、マテバシイとスダジイの煎ったものと、すり潰してツナギにヤマイモとウズラの卵を加えて焼いた縄文クッキーや、丸めて鍋の具材にしたドングリ団子を試食していただきました。

マテバシイとスダジイはそのままで食べられます。フライパンで煎って食べると、ほんのりとした甘みがあってとてもおいしいドングリです。ただし、マテバシイは縄文時代、南九州で自生していましたが、関東地方にはなかったと考えられています。

縄文人は、クヌギやコナラといった水だけでアクが抜けるドングリを主に食べていたと考えられています。韓国では今でも、クヌギを粉にして水で溶かし、煮詰めてゼリー状にした「ムック」という食べ物があって、家庭料理として食べられています。

次に、**トチの実**と呼ばれるトチノキの種子。クリと少し似ているのですが、アクが強烈です。流水に長時間さらした後、さらに灰を加え熱湯でアク抜きをしなければならず、とても手間がかかります。しかし、保存がきき、実が大きいことから、手間がかかっても大切な食料だったのでしょう。

もちろん、縄文人はアク抜きの必要がない**クリ**も多く食べていました。最近の花粉分析では、縄文時代前・中期にはクリが多く、気候の寒冷化が始まる縄文時代後期以降はトチの実の利用が増えるということが指摘されています。気候の変化は食料の変化にも深い関係があって、縄文人はそうした環境の変化や食料の獲得に柔軟に適応していたと考えられます。

そして、**クルミ**。一番馴染み深い木の実かと思

いますが、普段食べているクルミは「カシグルミ」という種類で、殻が薄く、実も取り出しやすい外国から輸入されたものです。日本に自生するクルミは、「オニグルミ」、「サワグルミ」、「ヒメグルミ」の3種類で、殻が非常に硬く、簡単に割れません。しかも上手く割らないと、実を取り出すのが大変です。

それでは、オニグルミを上手に割る「コツ」をお教えしましょう！オニグルミの殻の尖った部分を上にして、その先端めがけて垂直に石で叩くと、「パカッ」ときれいに二つに割れます。上手く割れば中身も粉々にならず、取り出すのも簡単です。遺跡から発見されたオニグルミの殻を観察すると、やはり尖った部分が潰れていて、二つにきれいに割れているものが目につきます。縄文人は、オニグルミを割るコツをちゃんと分かっていたんですね。

こうしたドングリやクリ、トチノキ、オニグルミなどの木の実には栄養価が高く、体を動かすエネルギー源となる糖質の高い点が特徴です。実際、煎ったマテバシイを食べると、10粒（約40g）ぐらいで満腹になります。またオニグルミは100gで626キロカロリーもあって、米飯にすると茶碗2杯分のカロリーがあります。高タンパク質なうえ、脂質も多く、獲物を追って野山を駆け巡っていた縄文人にとっては重要なエネルギー源だったに違いありません。食べ物が豊富にある現代人にとっては、食べすぎに要注意な木の実ですね。

さて、年間展示「縄文人の食事」も来る3月にはよいよ展示替え。平成24年度年間展示解説シリーズも今回が最終回です。平成25年度の展示は果たしてどんな展示になるのか…皆さんご期待ください！（鈴木）



木の実の盛り合わせ

多摩ニュータウンNo.237・962遺跡は、相原・小山地区にあり、多摩ニュータウン遺跡群の最西端に位置します。

当時は、センター本部から各現場へと車で往復して調査を行っていました。最も遠隔地に位置する当遺跡からの帰着は、他の職員全てが到着しゆっくりと歓談している頃であり、往復に多くの時間を費やした思い出があります。現場は、幹線道路から少し入った場所にあり、雪の降った日などは、アップダウンのある悪路を汗ビショリになりながら、調査員3名で車を押して現場事務所へと向かったものです。

No.237遺跡とNo.962遺跡は、多摩川水系と境川の分水嶺となる東西に延びる丘陵に立地します。南側の境川と北を流れる大栗川に向かって小支谷が開析された、丘陵の頂部からタコ足状に延びる尾根とその斜面部を9回にわたり調査しました。丘陵の広範囲を調査したことで、両遺跡が一体のものであり、丘陵全体における縄文時代を中心とした遺跡の全体像をほぼ解明することができました。

尾根部には105基の炉穴と80基の焼土が並び、斜面部から谷底にかけては158基の陥し穴土坑が検出されました。また、

中期の住居跡4軒が尾根上で発見されており、埋設土器2基、集石18基を合わせると、縄文時代の遺構は367基にのぼります。ことに、丘陵頂部を取り巻くように検出された炉穴と遺物は、早期後半の子母口式期から野島式期の段階における生活拠点であったことを窺わせます。炉穴は、形態から3タイプに分けられ、複数のタイプが混在する小さな単位を形成し、環状に分布していました。

多くの地点で、早期前半から後期中葉の土器や石器などが多数出土しており、多数の炉穴が造られた早期後半の遺物が主体を占めます。そのなかで、遺跡西側南寄りの緩斜面で出土した押型文土器（右下図：高さ27cm）と大型の沈線文土器（下図：高さ58cm）などで構成される早期中葉の土器群は、器形を窺い知ることのできる数少ない資料として注目されます。

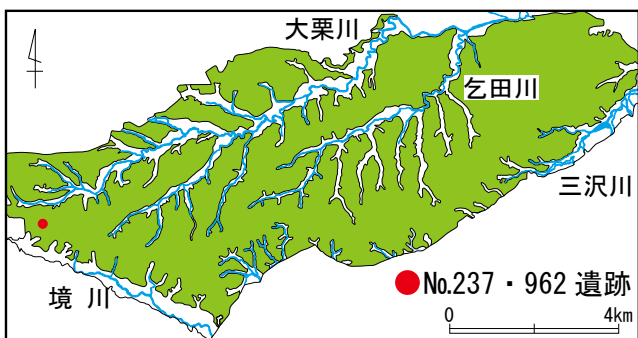
このほかにも、旧石器時代のナイフ形石器文化期の遺物集中部や尖頭器などが発見され、古代の土坑も27基が検出されています。

本遺跡の調査成果は、東京都埋蔵文化財センター調査報告第28・39・49・153集と東京都埋蔵文化財センター年報15（1994年度）に収められています。（川崎）

1 / 964

多摩ニュータウン地域では、964ヶ所もの遺跡が確認されています。その中から調査担当者の記憶に深く残る遺跡について、リレー方式で振り返っていきます。

12・13 多摩ニュータウンNo.237・962遺跡



多摩ニュータウンの遺跡



旧石器時代のナイフ形石器と尖頭器（右端：長さ8.2cm）



早期後半の炉穴群



中期後半の竪穴住居跡



沈線文土器



押型文土器



カラムシ

分類：イラクサ科カラムシ属

カラムシ

分布：東アジア全域

特徴：雌雄同株

開花 8月～10月

苧麻

(チョマ)

遺跡庭園「縄文の村」では、縄文時代にも生えていた50種類以上の樹木のほか、多くの野草に出会うことができます。これらの植物と縄文人とのかかわりについて紹介します。

遺跡庭園には、縄文時代に生えていた様々な植物が植えられています。中には鳥や風が運んできたであろう植物も芽吹いたりします。外来種や他の植物の生育を阻むものは、抜き取ったりしますが、そのまま生えるに任せるものも沢山あります。

そんな遺跡庭園の植物の中で、毎年その成長度合いに職員が一喜一憂するものがあります。

皆さんは「カラムシ」をご存知でしょうか？「ムシ」とついていますが、昆虫ではありません。遺跡庭園の一角で栽培している植物です。

やや日陰で湿り気のある場所を好みますが、適応力も高く、それ以外の場所でもよく見かけます。街中でも道路脇などに自生しており、一見シソに似た葉っぱで、名前は知らなくても目にしたことがある人は多いはず。繁殖力が強く、フクラズメという蛾の幼虫が多くつくため、今では嫌われることの多いカラムシですが、昔の人々はこのカラムシから生活に欠かせないあるものを取り出していました。

そのあるものとは「繊維」です。カラムシの茎の皮からは上質で丈夫な靱皮繊維が取れ、衣類をはじめ、様々な用途に古くから利用されてきました。

今では珍しいカラムシの繊維ですがその歴史は古く、縄文時代早期の鳥浜貝塚（福井県）からはカラムシの種子が見つかっており、やはり縄文時代の晩期の中山遺跡（秋田県）からはその繊維を利用した編布が出土しています。

カラムシとの関係は今日まで続いています。江戸時代になって木綿栽培が本格化するまで、日本の織

維類は麻類が中心でしたが、カラムシもその一つで、麻（大麻）よりも高級品でした。『日本書紀』ではカラムシの栽培を奨励する記載が見られ、奈良の正倉院に収められている麻織物の8割がカラムシの繊維で作られたものです。中世には、カラムシの繊維の販売を扱う「座」が作られ（青苧座）、当時カラムシの一大産地だった越後国の大名の上杉謙信は、衣類の原料として青苧座を通じて京都などに積極的に売り出し、大きな利益を得ていました。新潟県の伝統工芸である小千谷縮や越後上布の原料もカラムシです。

東京都埋蔵文化財センターでは年に2回、このカラムシの繊維を自分で取り出して、それを撚り合わせて糸を作る「糸作り体験」を行っています。興味のある方はぜひお越しください。（武内）



カラムシの繊維(右)とそれを使った編布による服(左)

「たまのよこやま」の由来 万葉集卷二十之四四一七の防人となった夫の旅立ちに備えて、山野で馬に草を食べさせていたところ、馬は逃げてしまった。やむなく徒歩で多摩丘陵を越えることになってしまった夫を見送る妻の嘆きを詠った「赤駒を山野に放し 捕りかて 多摩の横山 徒歩ゆか遣らむ」(宇治部黒女)を由来としています。



たまのよこやま 91

2013年1月31日発行

東京都埋蔵文化財センター 〒206-0033 多摩市落合 1-14-2 TEL 042-373-5296 <http://www.tef.or.jp/maibun/>